

〔県民局だより〕

第13回全国草地畜産コンクール

(社)日本草地畜産種子協会 会長賞受賞

備中県民局農畜産物生産課 畜産第2班

(社)日本草地畜産種子協会主催の「第13回全国草地畜産コンクール」が、6月29日、東京都(発明会館ホール)で開催され、新見市神郷の和牛農家、土井肇氏が(社)日本草地畜産種子協会会長賞を受賞されました。

土井さんは、昭和40年に就農し、搾乳牛40頭規模まで酪農経営を拡大されましたが、平成5年、和牛の共進会用にETの借り腹を頼まれ、雌が産まれて残したのがきっかけで、その後、乳肉複合経営へ移行しました。一方、水分の高い乳牛の糞尿処理を簡素化したい思いもあり、平成19年には乳肉複合経営から全面的に和牛繁殖経営へシフトし、現在繁殖牛48頭、育成牛6頭、子牛33頭を飼育しており、今年1年間で50頭の分娩予定(1～12月)となっています。



労働力は奥さんと二人、施設や機械は酪農経営時代からのものが多く、長期間大切に活用されています。一方で、自分の山の間伐材を利用して低コス



トで牛舎を増築しており、牛舎内部には様々な工夫が施され、木陰のあるパドックでは牛が快適に過ごしています。

当地区は、以前は大根や木材用の苗畑などが多く見られましたが、近年耕作放棄地が増加し、土井さんへの利用依頼も増えているようです。現在、採草地は8haで、うち5haが借地です。作付は4haがオーチャードグラスとトールフェスクの混播牧草、残りの4haはリードカナリーグラスとなっています。し



かし、ほ場は写真のように点在しており作業は効率的とは言えません。現在に至るまでも、土地を借りて作付してみても、また良い場所が見つければそちらへ移転し、トウモロコシへの獣害も受けながら、様々な苦労を経て、現在の場所となりました。

リードカナリーグラスは、当地区ではあまり見かけることのない草種ですが、湿害にも強く、水田でも作付可能な多年生の牧草であり、生育旺盛でギンギンに強く、トラクターの踏圧にも丈夫で、和牛繁殖経営に転換してからは、主力になりつつあります。また、混播牧草とは収穫時期をずらすことが可能となり、労働分散が図られています。

酪農経営時代の知識や感覚もうまく取り入れて

岡山畜産便り 2009.08

おり、母牛は繋ぎ方式で飼養し、分娩直後に子牛を分離する超早期母子分離と、人工哺育を採用し、初乳は手搾りで搾乳し給与、子牛の疾病予防、母牛の早期発情回帰等に心がけています。

今回の受賞式では、他の出品財を見ても、それぞれの地域の中で、畜産がうまく組み込まれて重要な役割を果たしている例が多く感じられました。特に、増加する耕作放棄地の受け手として、畜産農家が様々な事業を利用し、試行錯誤を繰り返しながら、地域の環境や調和を保つ事例が多くありました。所得が全てではなく、経営者の理念を感じることでできた受賞式であり、まさに土井さんの経営そのものが評価され、受賞につながったのだと思います。

酪農経営から、このような和牛繁殖経営への転換は、施設機械の有効活用が図られ、畜産経営が維持されるとともに、高齢化等により遊休農地となっ

た水田や畑の飼料生産基盤としての利活用は、地域環境保全に有効な対策となっており、今後、他の酪農家への方向示唆と本県の畜産の活性化に大きく貢献しています。

この取材中にも新たに3～4haのほ場の管理を引き受けられることとなりました。

土井さんはいつも、「特に何も特別なことはしていない」とおっしゃいますが、長年培った牛の管理技術を最大限生かし、自給飼料生産を基軸としたこのような足腰の強いモデル的な経営としてこれからも頑張ってくださいと思います。

(ご多忙中にも関わらず、度重なる取材に快くお付き合い頂き、ありがとうございました。)

